

そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。これは、キリニウスがシリヤ州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。その地方で羊飼いたちが野宿をしなが、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。「いと高きところには栄光、神にあれ、／地には平和、御心に適う人にあれ。」—ルカ2章—

主の降誕(夜半) 「天には神に栄光 地には平和」

神から生まれた世界と人類は、生まれた子供はお母さんが全てであるように、神を全てとして仰げば、秩序正しい平和な世界になる筈でした。ところが、人類は、自分本位に生きて世界の秩序は乱れ、地球の危機が叫ばれる昨今です。

産業革命以来、人類がひたすら求めて来たのは『欲望』。それに応えるものだけが生き延びて今日の非人間的価値観(機能性、合理性、生産性)を造ってきたのです。人間的価値観(平和、家庭、愛・)は社会の中には持ち込めず、私事の領域に押し込められ、大切なものを大切と言わないでおかしくなった社会が今、破滅を目前にしているのです。

心は地に落ちたまま、

豊かさを求めて科学は天を突きまでに発達し、そして皮肉にも、その豊かさの中で、現代「生きがい」を探して自殺にまで追い込まれていく人が後を絶ちません。

かつて私たちがみんな貧しかった頃、私は今のような生きがいという言葉を知りませんでした。「生きる」ことが生きていでしたから。

今、街中で見かけるクリスマス飾りはイルミネーションが光の海を呈して、世の中、何処にも闇がないかのような錯覚に陥ります。しかし、『生きがい探し』が存在している現実、蠟燭の火でも、イルミネーションの灯でも、太陽でさえも照らせない心の闇があると、いうことを示しているのです。

私たちが求めている光(幸せ)は、実は「幸せのよくなもの」であって、手

にすればもっともっと欲しくなり果ては破局に向かう一種の麻薬です。神が放つ光(本当の幸せ)は、お金や出世ではなく、皆と共生・共有出来る平和や喜びのように、欲望ではなく、『心』が満たされるものです。それは到来してください。イエス様と出会い、神を心にいただくことなのです。

「天には神に栄光」とは、神を心にいただくことであり、馬草桶の幼子をいただくことが「地に平和」をもたらすことなのです。牛や馬がご飯を食べる茶碗である馬草桶の幼子。それは「私を食べてください。私のように人を大切に、平和の人になるように」と言う人類への神からのメッセージです。

今日、来てくださるイエス様をあなたの心に受けてください。

12月25日

昌川信雄